

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 7 月 31 日現在

機関番号：37102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26420659

研究課題名(和文) 1950年代北朝鮮におけるバウハウス卒業生K.ピュシエルの咸興市戦災復興計画

研究課題名(英文) The Post-war Reconstruction Planning of Hamhung in 1950s North Korea by Konrad Pueschel, a Graduate of the Bauhaus

研究代表者

富田 英夫 (TOMITA, Hideo)

九州産業大学・工学部・講師

研究者番号：80353316

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：ピュシエルの計画の方法論は、(A)構造的性質の調査、(B)それに基づく新しい秩序づけ、(C)戦災復興の全体計画の完成、という三段階で示される。彼は、朝鮮半島の集落と都市は、景観の構造と造形、および風景、社会、経済の相互関係に根づいていると結論づけた。広場と街路ネットワーク、近隣区の計画、および農業生産協同組合の計画において、咸興の計画はソ連および東ドイツと理論を共有していた。一方で、咸興の復興計画は事前調査の成果に基づいているため現地の特徴的な風景と調和していた。このように咸興市戦災復興計画は、ソ連と東ドイツから北朝鮮へという社会主義都市の計画理論の国家を超えた伝播の状況を示している。

研究成果の概要(英文)：Pueschel's planning methodology is described in three stages: (A) a survey of the structural properties, (B) new ordering of spaces targeted for planning based on structural properties, and (C) completion of overall planning for post-war reconstruction. Pueschel concluded that the cities and settlements in the Korean peninsula are rooted in the mutual relationships between the structure of the landscape and Korean society and economy. In the square and streets network planning, Wohnkomplexe planning, and LPG planning, while USSR, East Germany, and Hamhung shared the same planning theory, the Reconstruction Planning of Hamhung were based on preliminary survey results conducted prior to the design, and, thus, it became a plan that was in harmony with the unique local landscape. In this way, the post-war reconstruction planning of Hamhung shows the spread of socialist city planning theory across country borders, from USSR and East Germany to North Korea.

研究分野：建築史

キーワード：戦災復興 朝鮮戦争 1950年代 北朝鮮 東ドイツ ソ連 都市計画 バウハウス

1. 研究開始当初の背景

ドイツ・モダニズム建築の研究において1930年代はドイツ国内の保守派勢力による新古典主義への回帰の時代、つまりモダニズム建築が敗北した時代とされる。そして1933年のバウハウス閉鎖以降、最終的にアメリカに渡ったバウハウスの教授達の活動については重要な位置付けがなされている一方で、2代目校長ハンネス・マイアーの下で学んだ学生達がソ連、東欧、中東に新たな活動の場を見出し、モダニズム建築を広めた事への評価は未だ十分ではない。バウハウスで学んだ学生達が卒業後に世界各地で活動した事に対しては、2009年ベルリンで開催された国際シンポジウム『バウハウス・グローバル』の前後から研究が進み、近年ではデッサウ・バウハウス財団が南米・アフリカ・アジアの熱帯地域の事例(2013)などを発表している。

2. 研究の目的

このような観点から、本研究はバウハウス卒業生で、復興を支援したドイツ人技術者団(DAG: Deutsche Arbeitsgruppe)の都市計画部門のリーダーを務めた東ドイツの建築家コンラート・ピュシエル(Konrad Püschel: 1907-1997)による1950年代朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)の咸興(ハムフン)における戦災復興計画に注目する。特に、ピュシエルがマイアーと共に行動する中で身につけた科学的な分析を重視した設計手法を適用し、現地の伝統的都市・集落の分析を基に、風景に合う形で戦災復興計画をまとめた事を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 分析方法

研究方法として、ピュシエル個人が残した資料を分析する際に、つねに図面や写真に表された内容と文章による説明を対応させ、内容を把握する方法を採る。さらに、明らかになった内容をピュシエルが所属したドイツ人技術者団の報告書と対照し検証する。それらの内容の1930年代ソ連および1950年代東ドイツとの関連を探り、社会主義国家の都市設計の歴史の上に位置付ける。

(2) 研究資料

研究資料として、主にピュシエル自身が執筆した論文、書籍、及びドイツのデッサウ＝ロスラウに位置するバウハウス・デッサウ財団が所蔵するピュシエルの咸興の戦災復興計画関係の未出版の資料(図面、書簡、報告、写真等)、加えてベルリンに位置するドイツ連邦公文書館が所蔵するドイツ人技術者団の半年毎の定期報告を用いた。

4. 研究成果

(1) 咸興戦災復興都市計画の方法論

ピュシエルが都市計画部門のリーダーを務めたのは1955年4月から同12月までと1957年9月から1958年12月までである。なお、1955年12月から1957年2月までペーター・デーラーが、1957年2月から1957年9月まではエーリッヒ・レッセルがリーダーを務めた。そして、ピュシエルは1959年1月に、報告「咸興・興南復興のための咸興計画局都市計画部門における1955年4月から1958年12月までの朝鮮人・ドイツ人技術者の共同作業の概観」を書いた後、1959年3月9日に咸興を立ちソ連経由での東ドイツへの帰国の途についた。都市計画部門のリーダーは1959年1月からカール・ゾンメラーが務めており、この報告書はピュシエルの咸興での仕事を総括する内容となった。

この報告の1章「咸興・興南地域の計画における課題と方法についての指摘」の後半部分にピュシエルの都市計画の進め方の特徴が記され、具体的には次の三段階が提示された。一段階目：計画対象地域の構造的性質の調査。二段階目：構造的価値に基づく計画対象空間の新しい秩序づけ。三段階目：咸興と興南の戦災復興の全体計画の完成。

このように構造的性質の調査、それに基づく新しい秩序づけ、戦災復興の全体計画の完成、という三段階の方法論でピュシエルは復興都市計画を完成させた。

(2) 朝鮮半島の住宅・集落・都市の調査

まず、都市計画部門の建築家達は分析図『朝鮮の民家形式』において、平面図式をもちいて地域によって異なる民家の内部空間と敷地における配置を分析し、朝鮮半島の各州の典型的な民家類型として分類した図面を作成した。そして民家形式が南北に長い朝鮮半島の変化に富む気候と密接にかかわりを持つことを示した。

次に、ピュシエルは論文において、朝鮮の集落と都市を地形の特徴によって分類した(谷の周囲の集落、川辺の集落、海沿いの集落、山の集落)。そして、地形の特徴と水のシステムが集落と都市の空間的な配置を決定していることを指摘し、常に山が生活空間上および行政区分上の領域を作り、その中には川や運河の水システムが含まれ経済の根本である稲作地が広がるという調査結果を得た。

以上のように、都市計画部門を指導したピュシエルは、朝鮮半島の民家、集落、都市がそれぞれの階層で風景と密接な関係を築いている事を指摘した。そして、ピュシエルは境界を作る山々とその領域の中央を流れる川という空間構造に特徴を見出した。それらを総合して、ピュシエルは朝鮮半島の集落と都市は、朝鮮の景観の構造と造形、および風景、社会、経済の相互関係に根づいていると

結論づけた。

(3) 咸興戦災復興都市計画の特徴

咸興における大衆デモのための街路ネットワークと中央広場

ピュシエルの1959年1月の報告における中央広場の計画についての設計意図を見ると、おおよそ次の4点が主題になっていることが分かる。すなわち、(1)中央広場と他の通りとの関係、(2)デモ通りと三本の通りの関係(図面上から市場通り、中央軸、無名の交通を重視した通り)、(3)中央広場に建つ12階建の中央棟、(4)デモ通りおよび中央棟の関係から検討した演台の位置、この4点である。

中央広場とは咸興市街地のほぼ中央に位置し、そこから西側を流れる川に向かって、放射状に三本の道路が伸びる。中央広場と三本の道路の交わる地点から延びるのがデモ通りである。中央広場には公共建築である12階建の中央棟が建ち都市空間における象徴的な意味を持たせてある。その中央棟の前面の広場がデモ参加者の集まる場所となる。そして演台の位置の検討の結果、群衆から見て南側に(演台の背後から太陽が射すように)配置された。

近隣区の設計

復興計画では、咸興を自然条件と交通技術を基に五地域に区分している。すなわち、咸興市街の中央(地名ではなく独語のZentrum)、市街から東北方面に位置する會上(ホェサン)、北方面に位置する盤龍山(パンリョンサン)、南東方面に位置する沙浦里(サポリ)、市街西側に流れる城川江の西側に位置する咸州(ハムジュ)の五地域である。

そして、各地域の下には複数の近隣区が置かれる。1956年8月30日の「1956/1957年建設の近隣区」によれば、行政区域の単位である近隣区には、小学校、幼稚園、保育園、クラブハウス、百貨店、商店を伴う住宅団地の集合が含まれることがわかる。

1958年の展覧会『咸興と興南』の記録によれば、この近隣区は1958年までに2つの区が完成しており、ピュシエルは1958年12月にそれまでの近隣区の設計・建設の経験に基づいて報告「社会主義的近隣区のためのプログラム開発」(1958年12月27日)をまとめた。

ここでは、近隣区の主題として次の8点を挙げる。(1)住まいの要求を満たす、(2)休養の要求を満たす、(3)社会的文化的要求を満たす、(4)日常生活の要求を満たす、(5)子供の教育、(6)健康を守る、(7)公共施設の供給、(8)交通との接続。これらの8点の主題を直接、近隣区が担うのである。すなわち、近隣区が商業、手工業、行政、教育、文化、衛生、扶養において重要な役割を持つ事が確認できる。

朝陽里の農業生産協同組合の設計

ピュシエルは1930年のバウハウスにおける卒業設計の後、1950年代以降に、東ドイツと北朝鮮で農業生産協同組合(以下LPG: Landwirtschaftliche Produktionsgenossenschaft)の設計に関わり、バウハウスでの学生時代に得たテーマを広く展開していった。特に、1958年に関わった咸興近郊の朝陽里のLPGにおいては、東ドイツと北朝鮮の間で同じ設計原則を共有しつつも、設計前の事前調査の結果に基づき、現地独特の風景と調和した計画とした。

1959年1月15日付けの「抜粋」と題したピュシエルの原稿からは、朝陽里全体のLPGには、村の委員会、党、警察、稲作地管理者、小学校、中学校、幼稚園、託児所、文化会館、農村診療所、商店、飲食店がこの地区に集中して配置させることがわかる。

ピュシエルは、咸興・興南の都市部では、近隣区という社会主義国家(特に1930年以降のソ連)で使われる小学校を中心とした住区単位をもちい、その構成要素は、小学校、幼稚園、保育園、文化会館、百貨店、商店等である。つまり、都市部の近隣区と農村部のLPGの構成要素は共通する部分が多いが、LPGではそこに農村独特の要素を組み込んで計画していた事が分かる。

(4) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

広場と街路ネットワーク、近隣区の計画、および農業生産協同組合の計画において、咸興の計画はソ連および東ドイツと理論を共有していた。一方で、咸興の復興計画は事前調査の成果に基づいているため現地の特徴的な風景と調和していた。

咸興の戦災復興都市計画については、既に1993年にR.フランクがモノグラフを出版しているが、本研究は上記のように、当時の社会主義国家間における都市設計理論の伝播という点に特に注目した点に特徴がある。咸興の計画は、全般的な背景として冷戦期の世界秩序を表していると同時に、ピュシエル個人の1930年代ソ連および1950年代東ドイツにおける都市計画の経験を反映していた。すでにソ連と東ドイツの間の都市設計理論の伝播は注目されているが、本研究では、そこに北朝鮮を加えることで地球規模でのトランスナショナルな理論伝播の状況を示すことができた。

(5) 今後の展望

これまで発表済みの各論をまとめて、査読付き学術誌へ論文を投稿する。

今後は、本研究で得た知見をもとに、新たなテーマとして1950年代前半の東ドイツの主要都市(ベルリン、ドレスデン、ライプツィヒ等)の戦災復興都市計画の調査を構想している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

Hideo Tomita, *Wohnkomplexe in the 1930s USSR and 1950s North Korea by an East German Architect*, Refereed Paper, *Proceedings of 11th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia (ISAIA)*, 2016, pp. 2288-2292.

富田英夫、「バウハウス卒業生コンラート・プシュエルによる咸興戦災復興計画」, 査読無、『日本建築学会九州支部研究報告集』第54巻、2015、pp. 613-616。

富田英夫、「東ドイツの建築家コンラート・プシュエルによる朝鮮半島の調査」, 査読無、『九州産業大学工学部研究報告』, 51号、2015、pp. 53-56。

Hideo Tomita, *A Survey of Korean Settlements by Konrad Pueschel, a Graduate of the Bauhaus*, Refereed Paper, *Proceedings of the 13th Docomomo International Conference Seoul 2014, Expansion & Conflict*, 2014, pp. 416-419.

富田英夫、「バウハウス卒業生コンラート・プシュエルによる朝鮮の都市・集落の調査」, 査読無、『日本建築学会九州支部研究報告集』第53巻、2014、pp. 589-592。

〔学会発表〕(計6件)

Hideo Tomita, *Collective Farming in Joyang, North Korea, in the 1950s by Konrad Pueschel, a Bauhaus Graduate*, Young Bauhaus Research Colloquium, *Dust and Data (Part of the XIII. International Bauhaus-Kolloquium)*, October 27, 2016, Bauhaus-Universität Weimar, Weimar (Germany).

富田英夫、「バウハウス卒業生コンラート・プシュエルによる咸興戦災復興都市計画」, 日本建築学会九州支部災害委員会第7回研究ワークショップ、2015年10月28日、福岡大学(福岡県福岡市)。

Hideo Tomita, *Wohnkomplex in socialist countries: The example of Konrad Pueschel in 1950s North Korea*, MAPPING THE NEIGHBORHOOD, *The Multiple Ways of an Urban Vision in the 20th Century*, School of Architecture and Society, June 17, 2015, Politecnico di Milano, Milan (Italy).

富田英夫、「東独の建築家K.プシュエルの咸興・興南戦災復興都市計画の方法論」, 日朝学術研究会第9回例会、2015年3月27日、同志社大学(京都府京都市)。

富田英夫、「咸興復興における東ドイツ建築家K.プシュエルの活動」(パネル「朝鮮戦争からの復興と都市・建築 平壤・咸興の事例から」)における担当、朝鮮史研究会第51回大会、2014年10月19日、京都府立大学(京都府京都市)。

富田英夫、「マイアー主導のバウハウス建築教育と卒業生達のソ連・イスラエル・北朝鮮での建築活動」, 日本建築学会九州支部歴史意匠委員会「教師と学生の研究交流会」, 2014年6月15日、九重共同研修所(大分県玖珠郡)。

〔その他〕

ホームページ等

<https://kyusan-u.academia.edu/HideoTomita>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

富田英夫 (TOMITA, Hideo)
九州産業大学・工学部・講師
研究者番号：80353316

(2) 研究分担者：該当なし

(3) 連携研究者：該当なし

(4) 研究協力者：該当なし